資　料

精神看護学実習における精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所での学生の学び
SPSS Text Analytics for Surveys を用いて

Students' Learning at Psychiatric Daycare and Work Continuance Support B Type Offices During Psychiatric Nursing Practice Using SPSS Text Analytics for Surveys

柿澤 美奈子[*1]　田中 高政[*1]　塚田 縫子[*2]

Minako Kakizawa, Takamasa Tanaka, Nuiko Tsukada

キーワード：精神看護学実習，看護学生，精神科デイケア，就労継続支援Ｂ型事業所，テキストマイニング

Key words : Psychiatric nursing practice, Nursing students, Psychiatric Daycare, Work Continuance Support B Type Office, Text mining

Abstract

The aim of this study was to shed light on students' learning during psychiatric nursing practice at the Psychiatric Daycare and the Work Continuance Support B Type Offices. We obtained consent from 78 students undergoing psychiatric nursing practice in 2012. We then analyzed the practice records of 71 students using SPSS Text Analytics for Surveys.

As a result, 26 categories were extracted. The students learned and integrated lifestyle with care because they worked together with the members at the psychiatric daycare and the Work Continuance Support B Type Offices during the practice, Furthermore, categories such as "responsibility and self-responsibility" and "empowerment" were extracted. The students deepened their learning of "recovery" which they learned in class, and they verbalized "recovery" as their own experience during a single day of practice at psychiatric daycare and Work Continuance Support B Type Offices.

The students perceived individuals with mental disabilities living in the local community as individual residents and learned about their recuperation from the viewpoint of "recovery;" thus, psychiatric nursing practice at Psychiatric Daycare and Work Continuance Support B Type Offices was found to be a meaningful practice that fostered students' ability to support individuals with mental disabilities living in the local community.

受付日2014年10月2日　受理日2015年2月10日

*1 佐久大学看護学部　Saku University School of Nursing

*2 社会福祉法人かがやき会　Social Welfare Corporation KAGAYAKI-KAI

要旨

本研究は、精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習（各1日）での学生の学びを明らかにすることを目的に、精神看護学実習を履修（2012年度）した学生78名のうち同意の得られた71名（回収率91.0％）の各実習記録をText Analytics for Surveysを用いて分析した。

その結果、26カテゴリが抽出され、学生は精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習で、メンバー（精神障がい者）と共に活動することにより、生活とケアを結びつけて学んでいた。また、〈責任・自己責任〉、〈エンパワメント〉のカテゴリの抽出から、学生はこの実習において、講義で学んだ「リカバリー」（精神障がいからのリカバリーの段階として希望、エンパワメント、自己責任、生活の中の有意義な役割などの要素を含む）について自らの体験として言語化していたといえる。

学生は、地域で暮らす精神に障がいをもつ人をひとりの生活者として捉え、その回復をリカバリーの視点で学んでいたことから、精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所での実習は、精神に障がいをもつ人の地域での生活を支援する力を培う実習として有意義であることがわかった。

Ⅰ．はじめに

１．研究の背景

我が国の精神医療について、厚生労働省の精神保健福祉対策本部は「精神保健医療福祉の改革ビジョン」（2004）で、「入院医療中心から地域生活中心へ」の基本理念を示した。「精神保健医療福祉の更なる改革に向けて」（厚生労働省, 2009）では、「入院から地域生活へ」の基本理念をさらに推進するために様々な提言を行った。しかし、精神科入院医療の現状は、1年以上の長期入院者は約20万人であり、精神障害者の地域移行は遅々としている。2014年、厚生労働省はさらに「長期入院精神障害者の地域移行支援に向けた具体的方策の方向性」を示し、その中で退院に向けた支援の具体策の一つとして、「医師、看護師等の基礎教育において、教員、学生等が精神障害者の地域移行支援の重要性について理解が深められるよう情報提供すること」と明記した。

看護を提供する場は病院から地域へと広がり、看護師には精神に障がいをもつ人を生活者として理解し、生活を支える視点や力がより一層求められている。看護基礎教育精神看護学分野では、精神に障がいをもつ人を生活者として理解し、支援する基礎能力を養うことが急務でありかつ重要である。

山田ら（2010）は、精神科デイケア・小規模作業所における地域精神看護学実習の学びとして実習レポートの内容分析で、学生は実習において、精神障がい者の地域生活や医療福祉従事者の役割、精神保健に関する社会資源の活用、法律や制度に基づく支援サービスを幅広く学んでおり、地域で生活している精神に障がいをもつ人と関わることによる学びは大きいと述べている。看護を提供する場とその役割の拡大に伴い、病棟外での実習の重要性が増していると考える。しかし、精神看護学実習における地域の事業所での学びに関する研究は少なく2010年以降の報告が散見される（山田ら, 2010；東ら, 2012；草地ら, 2012；磯村ら, 2013）。

筆者らは精神看護学実習において、地域で生活する精神疾患患者の理解を深めることを目的とし、精神科病棟における受持ち患者の看護を展開する実習の他に、精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習（各1

日)を行なってきた。本研究は、精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習記録の分析を行い、学生の学びを明らかにして、精神看護学の授業をより良いものとするための示唆を得ることを目指すものである。

２．テキストマイニングについて

テキストマイニングとは、文章(テキスト)から有益な情報を発掘(マイニング)するための方法である(川嶋, 2012)。テキストマイニングは、文章を単語や句に分割し、単語の出現頻度や単語間の関係を統計的に分析することであり、質的研究に数量化を取り込んだものである。

質的研究における内容分析は、研究者自身がもつ直感、洞察、視点そして志向性といった主観が分析や解釈するための装置として用いられるため、分析や解釈のあいまいさは否めない。しかし、テキストマイニングのソフトウエアを使用し、同じデータに対して同じ方法を適用した場合は、まったく同じ結果が得られ100％信頼できるものであるといえる。そのため、テキストマイニングは、大量のテキストデータを効率的・客観的に分析するという目的を達成するための有効な手段と考えられ、アンケート調査における自由記述式回答の解析やWebサイトへの書き込み文章の解析などに有効である(川嶋, 2012)。

今回、実習記録として自由記述されたテキストデータをテキスト分析ソフトにて分析し、学生の学びを明らかにしたいと考えた。テキスト分析ソフトであるText Analytics for Surveysは、自然に書かれたテキストデータの中から、“分析者にとって”意味のある語彙に着目し、分析から抽出された情報をもとにカテゴリを作り解析する(川嶋, 2012)と言われており、精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習記録を、テキスト分析ソフトを使い分析することで、客観的データとしての学生の学びを明らかにすることを試みた。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は、精神看護学実習における精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習記録を分析・検討することにより、精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習での学生の学びを明らかにすることである。

Ⅲ．研究方法

１．対象

2012年9月～2013年1月の期間に精神看護学実習を履修した学生78名のうち、同意の得られた学生71名の精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所のそれぞれの実習記録を分析の対象とした。精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習記録は、実習の学びと感想を合わせ、それぞれA4の記録用紙1～2枚程度に自由記述することを学生に求めている。

２．精神看護学実習の概要

本学の精神看護学実習(2012年度)は、2週間(2単位90時間)の実習期間中に精神科病棟で一人の受持ち患者を中心に看護計画を立て看護を実施する。これに加え、地域で暮らす精神障がい者を理解するために、精神科デイケアと就労継続支援Ｂ型事業所に各1日ずつ参加実習を行っている。その実習目標は、地域で暮らす精神障がい者への支援のあり方を理解し、施設における精神保健福祉の多職種の理解と協働を学ぶことである。その行動目標は1)利用者と共にデイケアプログラムに参加し、精神科デイケアの意義・役割について学ぶ、2)利用者と共に事業所のプログラムに参加し、精神障がい者の社会参加の実態および共に生きる社会について理解する、を挙

げている。

３．分析方法

精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の各実習記録をIBM SPSS Text Analytics for Surveys4.0を用いて自動的に分析した。

精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習記録の記述をMicrosoft Excelに入力し、IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0に取り込み、分析を行った。分析は、係り受け分析[1]を用い、言語学的手法に基づくカテゴリ化[2]を行った。カテゴリ設定は、タイプ[3]からなる記述子とし、名詞、動詞、形容詞、形容動詞を選択、言語学的手法に基づいた設定は内包関係[4]にあるコンセプト[5]を抽出、共起規則[6]を有効とする設定とした。次にカテゴリ間の共通性[7]を把握するためWebグラフ[8]を作成し可視化を行った。

本研究は、分析の妥当性の確保のため、研究者間での分析の過程を共有して進めた。

４．倫理的配慮

本研究は、学生の実習記録を分析するものであり、以下のようにして対象のプライバシーや自由意思による参加を保障した。

研究参加への依頼は、実習成績通知後とし、参加拒否による不利益はなく、学生の自由意思を尊重した。実習記録は本研究の目的以外には使用しないこと、研究成果は匿名性を保障し公表することを文書および口頭にて説明した。研究参加の同意は、実習記録のコピーの提出をもって同意とみなした。本研究は、佐久大学研究倫理委員会の承認を得た（受付番号12-0010）。

Ⅳ．結果

78名のうち同意の得られた71名（回収率91.0％）の精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の各実習記録をText Analytics for Surveysによる係り受け分析を行った。レコード[9]は2176あり、言語学的手法にてカ

---

1 SPSS Text Analytics for Surveysは、係り受け分析、感性分析、キーワード抽出の3つの分析機能がある。係り受け分析とは、品詞に基づいて関係性を把握するものである。例えば「沈む」という語を取り上げると、「気分が沈む」といった表現を係り受け分析では「気分が沈む」〈動詞〉と抽出され、感性分析では〈悪い－悲しみ全般〉といった感性タイプが認識される。

2 言語学的手法に基づいたカテゴリ化とは、同じ意味を持つ、あるいは言語学的に関連性のあるコンセプトを特定しカテゴリを作成する。

3 タイプとは、日本語文法で品詞と呼ぶものである。品詞とは、文法上の類別した単語の区分けであり、名詞、代名詞、動詞等11品詞に分類できる。

4 内包関係とは、アルゴリズムを使用して、あるコンセプトとそれを含んだ（内包した）コンセプトを抽出しカテゴリ化する。例えば「電話料金」、「携帯電話」などのコンセプトを「電話」というカテゴリにまとめる。

5 コンセプトとは、SPSS Text Analytics for Surveysでは、語彙（単語の総体）のことである。

6 共起規則とは、同一回答内で一緒に出現している語をまとめるものである。例えば、「ピクニック」と「おにぎり」などのように頻繁に一緒に出現するキーワードをまとめたカテゴリを作成する（条件規則あり）。

7 カテゴリ間の共通性とは、2つのカテゴリ間で共有されている回答の個数である。

8 Webグラフ（カテゴリWeb）とは、カテゴリ間の共通性を可視化したものである。Webグラフの各ノード（●で表現）が一つのカテゴリを表す。ノードの大きさは、そのカテゴリ内の回答の個数に対応している。回答数が多いほど相対的に●が大きく表現される。カテゴリを結ぶ線の太さは、共有する回答数の個数を示しており、実線および点線で表現され、共通性が高いほど相対的に太く表現される。カテゴリ間の位置や距離には意味はない。

9 レコードとは、1つのセルにおさめられたテキストのことである。テキストは句点で区切り入力した。今回の分析において、1レコードとは1センテンスである。

10 SPSS Text Analytics for Surveysは自動化手法によりコンセプトをカテゴリ化し、その中でカテゴリの代表にふさわしい語を選ぶ。代表名を選ぶ基準は、最も短い文字列である。

テゴリ化を行った。カテゴリ名[10]は、Text Analytics for Surveysが選んだものとした。抽出した30のカテゴリのうち、他のカテゴリと100％共有する回答のあった〈生活〉、〈集団活動〉、〈自分〉、〈自己責任〉の４カテゴリを削除し、26カテゴリとした。削除したカテゴリ名は、共有していたカテゴリ名に加えた。カテゴリは、図１・２に示した。

26の〈カテゴリ〉とレコード（％）は、〈いう〉616レコード（28.3％）、〈ある〉525レコード（25.4％）、〈分・自分〉341レコード（15.7％）、〈メンバー〉315レコード（14.5％）、〈人〉312レコード（14.3％）などであった。

今回、26カテゴリの中で〈活・生活〉、〈責任・自己責任〉、〈エンパワメント〉の３カテゴリに着目した。これらは実習目標である、地域で暮らす精神障がい者への支援の基盤となるリカバリーの視点として挙げられている「希望」、「エンパワメント」、「自己責任」、「生活の中の有意義な役割」（Ragins, M., 2002／前田ケイ, 2005）に関連したカテゴリである。その〈カテゴリ〉とレコード（％）は、〈活・生活〉241レコード（11.1％）、〈責任・自己責任〉30レコード（1.4％）、〈エンパワメント〉18レコード（0.8％）であった。それぞれのカテゴリのWebグラフを図３・４・５に示した。

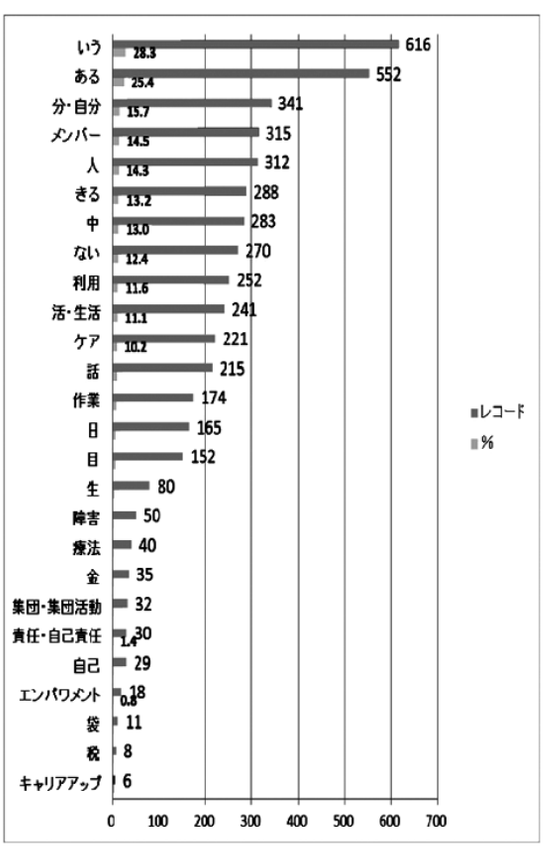

図１　抽出されたカテゴリ

今回の分析では、リカバリーの視点である「希望」というカテゴリは抽出されなかった。しかし、「希望」という名詞として42のコンセプトが抽出されていた。

１）〈活・生活〉とカテゴリ間の共通性（図３）

〈活・生活〉のカテゴリは〈いう〉、〈中〉、〈ある〉を含めた18のカテゴリと10以上の共有する回答があった。

２）〈責任・自己責任〉とカテゴリ間の共通性（図４）

〈責任・自己責任〉のカテゴリは〈中〉、〈エンパワメント〉、〈活・生活〉、〈自己〉、〈生〉と10以上の共有する回答があった。〈責任・自己責任〉と〈中〉のカテゴリの共有する回答は13レコードあり、〈責任・自己責任〉と〈エンパワメント〉の共有する回答は12レコード、〈責任・自己責任〉と〈活・生活〉の共有する回答は11レコード、〈責任・自己責任〉と〈自己〉の共有する回答は11レコード、〈責任・自己

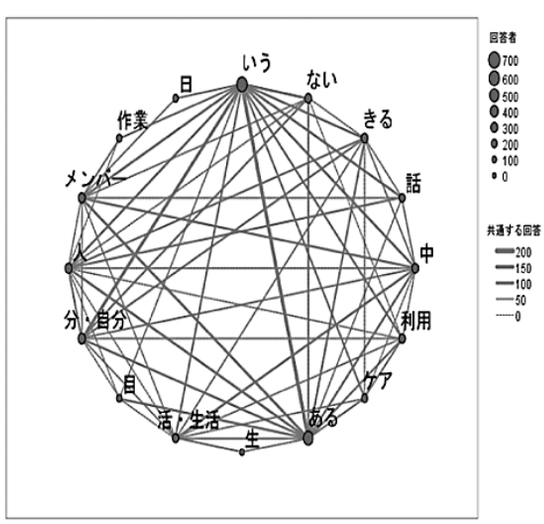

図２　抽出されたカテゴリ間の共通性（30以上）

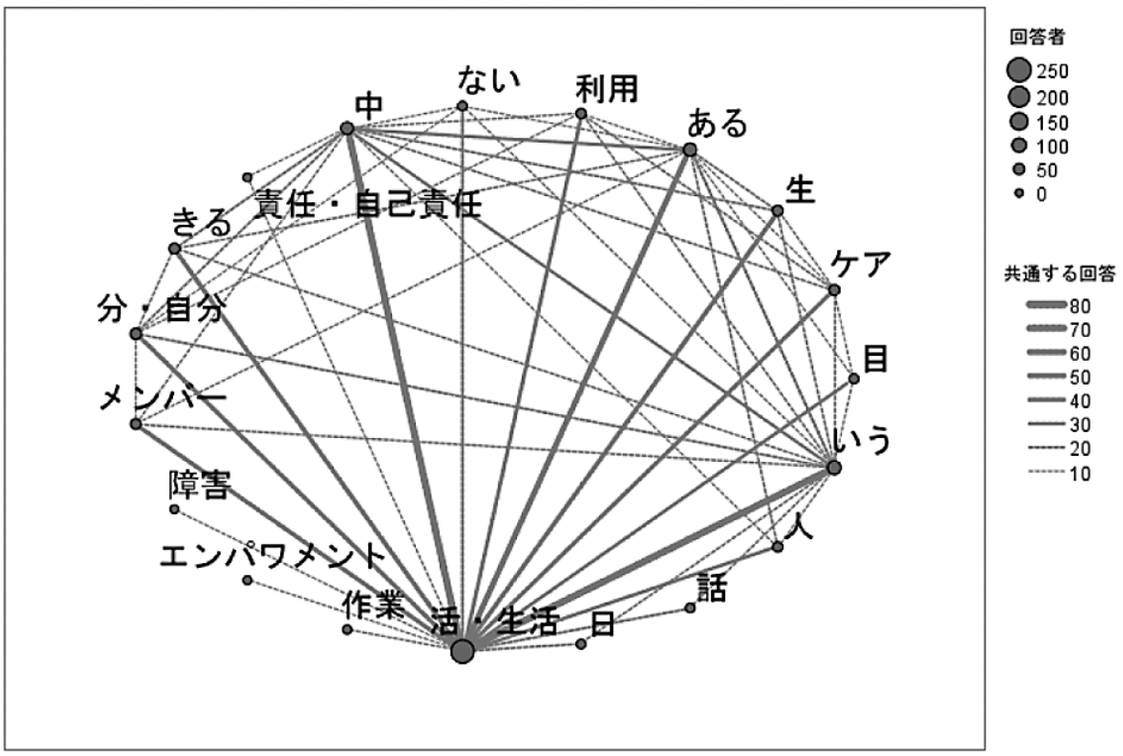

図３　〈活・生活〉の共通性

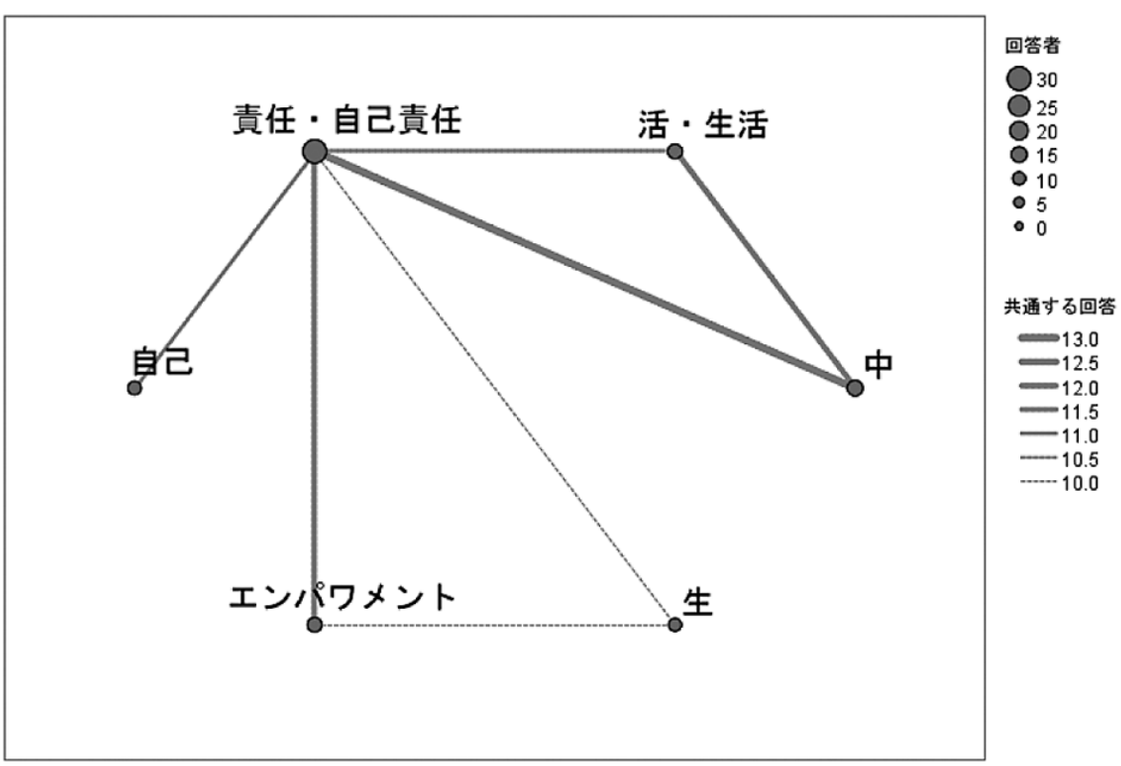

図４　〈責任・自己責任〉の共通性

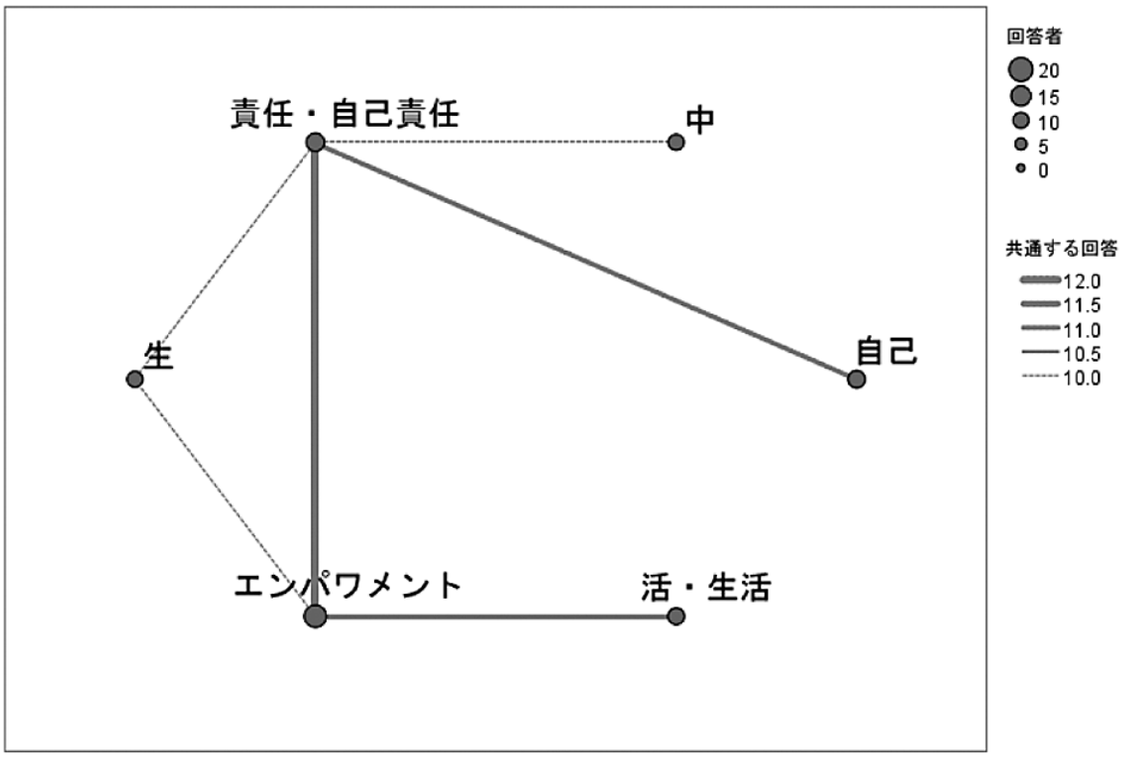

図５　〈エンパワメント〉の共通性

責任〉と〈生〉の共有する回答は10レコードであった。これらのレコードは、リカバリーの視点である「希望」、「エンパワメント」、「自己責任」、「生活の中の有意義な役割」と関連して記述していた。

３）〈エンパワメント〉とカテゴリ間の共通性（図５）

〈エンパワメント〉のカテゴリは〈責任・自己責任〉、〈活・生活〉、〈生〉と10以上の共有する回答があった。〈エンパワメント〉と〈責任・自己責任〉のカテゴリの共有する回答は12レコードあり、〈エンパワメント〉と〈活・生活〉の共有する回答は11レコード、〈エンパワメント〉と〈生〉の共有する回答は10レコードであった。これらのレコードに関してもリカバリーの視点である「希望」、「エンパワメント」、「自己責任」、「生活の中の有意義な役割」に関連して記述していた。

Ⅴ．考察

１．精神科デイケアおよび就労支援Ｂ型事業所の実習での学び

精神科デイケアおよび就労支援Ｂ型事業所の実習記録の分析結果より、26カテゴリの中で〈活・生活〉、〈責任・自己責任〉、〈エンパワメント〉の３カテゴリに着目した。〈活・生活〉のカテゴリは〈生〉、〈ケア〉、〈メンバー〉、〈利用〉のカテゴリ間の共通性が10以上あり、学生は、精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習において、事業所等を〈利用〉している〈メンバー〉と共に活動することで、〈生活〉と〈ケア〉を結び付けていたといえる。

東ら(2012)は、学生が地域の施設訪問実習によって精神障がい者への理解が深まり、精神に障がいを持つ人も生活者であるという認識につなげることができたと述べている。本研究においても精神科デイケアや就労継続支援Ｂ型事業所での実習は、〈活・生活〉のカテ

ゴリ間の共通性から、学生は生活とケアを結び付けていたことが明らかになり、精神障がい者の地域での生活を支えるケアの理解に成果があることが認められた。

今回、カテゴリ化された〈責任・自己責任〉、〈エンパワメント〉は、Ragins, M. (2002)／前田ケイ(2005)が精神障がい者が主体的に生きるためのリカバリーの4つの段階として述べている1)希望、2)エンパワメント、3)自己責任、4)生活の中の有意義な役割の中の項目である。また、〈責任・自己責任〉や〈エンパワメント〉のカテゴリの共通性やそのレコードの記述から、学生は精神障がい者のリカバリーについて自らの体験として言語化していたといえる。学生は精神看護学の講義でリカバリーについて知識として学んでおり、精神科デイケアや就労継続支援Ｂ型事業所の実習において共に活動するという体験から学びを実感していたといえる。

授業としての実習は、看護基礎教育において看護実践能力を培うために極めて重要であり、看護の方法について「知る」「わかる」段階から、「使う」「実践できる」段階に到達させるために不可欠な過程である(文部科学省, 2002)。講義では知識として理解し、実習は体験として実感する過程といえる。今回、学生は精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所でリカバリーについて実習という体験から学んでいた。

リカバリーの概念は、精神疾患からの回復であり、精神障害を疾患ではなく経験として捉える試みとして1990年頃より広がった(Anthony, W.(1993)／濱田龍之介(1998)：野中, 2005)。回復recaveryとは、疾患からの完治や発症前の自分に戻るのではなく「精神疾患の破局的な影響を乗り越えて、人生の新しい意味と目的を作り出すことであるAnthony, W.(1993)／濱田龍之介(1998)。」伊藤(2006)は、精神科病院が治療構造を見直し、患者のエンパワメントとリカバリーを促すシステムに変わることが患者の地域での生活を支援する医療の推進につながると指摘している。つまり、看護基礎教育においてリカバリーについて理解することは、精神に障がいをもつ人が地域で暮らすことを支援する力、精神障がい者の地域移行支援を促進する力の基礎能力を培うことである。

今回、精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習記録の分析で、リカバリーの4段階として述べられている「エンパワメント」、「自己責任」、「生活の中の有意義な役割」に関連したカテゴリ名が確認されたが、「希望」というカテゴリは抽出されなかった。しかし、「希望」という名詞として42のコンセプトが抽出されていた。南山(2011)は、「『希望』(中略)は、極めて社会的なものであり、(中略)場合によっては個人の人生や生活を生きづらいものとしてしまう可能性がある」と述べている。「希望」は、簡単には表現されにくい要素であり、カテゴリとして現れなかったと考えられる。また、Text Analytics for Surveysのカテゴリ名自動化手法の限界であるともいえる。

精神に障がいをもつ人は、疾患の状態により入院治療が必要な時期や病的体験により希望を失っているときもある。また、学生は病棟実習において患者の症状にとらわれ、その人の未来が見えなくなっていることもある。しかし、精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習で病気からの回復者と共に過ごし、闘病の体験など彼らの語りから、学生は、受持ち患者の回復の具体的なイメージを描くことができ(磯村ら, 2013；草地ら, 2012)、病気を回復過程と捉えることができていた。病気を回復過程と捉え、患者の未来を信じることができれば、患者をエンパワーすることができる。伊藤(2006)が述べているように、患者のエンパワメントとリカバリーの理解が生活を支える看護実践の基盤になると考える。

学生は、精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所での実習において、精神に障がいをもつ人を生活者と捉え、リカバリーの実際を自らの体験として言語化していたことから、精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所での実習は、地域移行支援の力を培う実習として有意義であるといえる。

２．カテゴリ抽出

精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習記録は、実習の学びと感想を自由に記述するよう学生に求めているため、文章の構成要素である〈いう〉、〈ある〉といった動詞や〈分・自分〉、〈メンバー〉という名詞のカテゴリのレコード数が高く抽出されるのは当然のことである。したがって、出現頻度の高い語句が必ずしも重要な語句であるといえない。特にテンプレートを用いた入力の場合、そのテンプレートの語句が最も高い語句として出現する。共通語として用いられているという指標にはなるが、差別化するための指標にはならない（川嶋, 2012）。Text Analytics for Surveysには、出現頻度に基づくカテゴリの自動生成の機能もあるが、上記の理由から今回は言語学的自動化手法を選択した。

今回は客観性を重視したためカテゴリ名も自動化手法をとった。そのため、カテゴリ名が短く、実際の学生の記録を確認するとその内容が表現できていないカテゴリもあった。今後、分析者はカテゴリ分類のルールやカテゴリ名をいかに作り込むのか、その能力と感性を高めることが必要である。

Ⅵ．結論

看護基礎教育における精神看護学実習において、地域で暮らす精神障がい者とその支援を理解するために精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所での実習を行った。

その実習で学生は、精神に障がいをもつ人をひとりの人として、また生活者として捉え、その回復を精神障がいからのリカバリーの視点で学んでいたことが、実習記録の分析から明らかになった。学生は精神障がいからのリカバリーについて、実習という自らの体験を言語化して理解していた。

精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所での実習は、精神障がいを持つ人々の理解と、回復支援のための基礎能力を培う実習として有意義であることがわかった。看護を提供する場が病院から地域へと広がっている実状を踏まえ、看護基礎教育では、精神障がい者の地域移行を積極的に支援できる看護師育成のため講義・演習・実習を効果的に組み立て、環境を教材化していくことが必要である。

Ⅶ．本研究の限界と課題

本研究は、精神科デイケアおよび就労継続支援Ｂ型事業所の実習記録を Text Analytics for Surveysを用いて分析し、学生の学びについて検討したものである。Text Analytics for Surveysは文章を自動的に分析するため、書き手の文章の表現や構成の影響を受けることは避けられず、本研究の限界といえる。

自由記述という非構造化された大量のデータを分析する場合、分析の時間が問題となるが、Text Analytics for Surveysは、大量のテキストを数分で分析できるソフトであり、分析時間の短縮が実現した。また、ソフトウエアによる分析であり信頼性も保たれている。このメリットは大きい。しかし、山西（2010）も述べているように「人の手による」質的な言語データの分析方法のような、ダイナミックかつ繊細な分析を行うことは難しい。テキストマイニングは、分析手法としての限界もあるが、その分析に精通し、かつ質的な分析と組み合わせることでさらに有効な分析方法になると考えられる。

謝辞

本研究にご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。

本研究は、平成25年度佐久大学研究助成金によって実施したものである。

文献

Anthony, W.(1993)／濱田龍之介(1998). 精神疾患からの回復：1990年代の精神保健サービスシステムを導く視点. 精神障害とリハビリテーション, 2(2), 65-74.

東久子, 久井志保(2012). 看護学生が地域精神保健の理解を深めるための実習方法の検討. インターナショナルNursing Care Research, 11, 3, 159-166.

磯村聰子, 山根俊恵, 草地仁史(2013). 精神看護学実習における地域社会資源実習で看護学生が得た学びの構造. 日本看護学会論文集　精神看護. 43, 155-158.

伊藤哲寛(2006). 精神障害者の社会的リハビリテーションの目標と課題―リカバリーとインクルージョン―. 精神科治療学. 21(1), 11-18.

川嶋敦子(2012). 第1部第1章テキスト分析の概要, 内田治, 磯崎幸子(共著), SPSSによるテキストマイニング入門(第1版). 1-25, 東京：オーム社.

厚生労働省, 精神保健医療福祉の改革ビジョン, 2012/12/28, http://www.mhlw.go.jp/topics/2004/09/dl/tp0902-1a.pdf

厚生労働省,精神保健医療の更なる改革に向けて, 2012/12/28, http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/09/dl/s0924-2a.pdf

厚生労働省, 長期入院精神障害者の地域移行に向けた具体的方策の今後の方向性, 2014/8/21, http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/0000051138.pdf

草地仁史, 山根俊恵, 磯村聰子(2012). 精神看護学実習における地域体験学習での学びの特徴　精神障がい者の地域支援に着目した体験の内容分析. 日本精神科看護学術誌. 55(2), 341-345.

南山浩二(2011). メンタルヘルス領域におけるリカバリー概念の登場とその含意：ロサンゼルス郡精神保健協会ビレッジISAに焦点をあてて. 静岡大学人文論集, 62(1), 17.

文部科学省,大学における看護実践能力の育成の充実に向けて, 2014/9/5, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm

野中猛(2005). リカバリーの概念の意義. 精神医学, 47(9), 952-961.

Ragins, M.(2002)／前田ケイ(2005). ビレッジから学ぶ リカバリーへの道 精神の病から立ち直ることを支援する(第1版). 東京：金剛出版.

山田浩雅, 中戸川早苗, 槽谷久美子, 岩瀬信夫(2010). 精神科デイケア・小規模作業所における地域精神看護学実習の学び　実習レポートの分析より. 愛知県立大学看護学部紀要, 16, 23-30.

山西博之(2010). 教育・研究のための自由記述アンケートデータ分析入門　SPSS Text Analytics for Surveysを用いて. 外国語教育メディア学会(LET)関西支部　メソドロジー研究部会2010年度報告論集, 110-124.